

# 木の目草の芽

## 木の目草の芽

2018年12月3日  
公益社団法人  
日本山岳会  
自然保護委員会  
TEL: 03-3261-4433

年間購読料 1,000 円  
申込: 047-463-8721  
syuaki@pony.ocn.ne.jp  
郵便番号00180-4-710688  
加入者名: 川口章子

### 三つ峠のアツモリソウ保護

（これまでの流れ及び生態系について）

山梨県希少野生動物種保護専門員

中村 光吉

かつて御坂山系や南アルプスの標高2500m付近までは、アツモリソウを含む今では見られなくなった多様な植生があり、それは登山者の大きな喜びでした。しかしこの40年程で大きな変化がありました。

当時、既に盗掘は始まっていて、登山道から少し離れたところを、大きな袋を持った数人の地下足袋姿の男達が下ってきて、たまたま私の知人（現在80歳位）に見つかり、まづいな見つかったという顔つきで袋から数本のアツモリソウを取り出し、「これをやるから黙ってくれ」ということです。おそらく袋の中には数百株のアツモリソウがあったのでしょ

う。自然公園法は既にありましたが、個別の植物等には盗掘という概念そのものが無かった時代です。盗られた花は当時河口湖周辺にたくさんあった山野草の店に並んだのでしよう。山採りのものと称し高く売れます。

当時は今のようないち技術はほとんどありませんから、特にウチョウランの人為的な交配で、花や葉に変わった模様や色の出現した個体に、勝手にいろいろな名前まで付けて百万円位の値をつけていた地元の人にもいました。戦争で様々なものを失い、やっと各家々にも自家用車や電化製品が置かれ、さらにもっと豊かになったという頃です。1970年代から

### 第135号

#### 〈目次〉

- P.1 三つ峠のアツモリソウ保護  
中村 光吉
- P.6 第18回ライチョウ会議  
新潟妙高会議レポート  
大会議事概要  
基調講演要旨  
日吉 健治
- P.9 連載コラム  
「ライチョウといつまでも」  
日吉 健治
- P.10 活動記録

1990年代のバブル景気に向かって、自然界の事など全く頭の中に入っていなかった時代です。山の花も自然界から盗られると、その後どうなるかなど誰も考えることができなかったと思います。

私は40年も前ですがヨーロッパに住んでいたことがあり、よくカレンダー等で見たスイス等の岩山の近くまで綺麗な草原が続いている風景は、日本の身近にある山林の下生えの草等、いわゆる藪山等を見慣れていた私には新鮮で文化もヨーロッパの方が上のように思えました。住んでいたストックホルムの街並みの美しさ、公園の鳥や動物たちの自由さ、彼らの住んでいる公園に私達が少し居させてもらっているイメージでした。その後、日本

に帰って様々な山や島々へ行くようになり、今度は日本の持つ自然界の多様さや奥深さを考えるようになりました。思い出すとヨーロッパの教会のある広場を中心に街ができていたり、パリの街を取り囲む高い塀、ギリシャ等で見えた城塞都市など、それらの国ができるまでの長い戦いの跡がいたる所にあります。山の上まで続く草原は、長い放牧のヨーロッパの歴史を思えば理解できます。かつてのヨーロッパは、森に覆われていたそうですが、それらを失った事で自然保護思想が生まれました。また戦争で、お互い不幸になるという事が身を持って解り哲学が生まれたと思えます。キリスト教は一神教であることから、他の神を許さず自然界もキリスト教の為にあり、森の魔物を追い払うため山の山頂に十字架を建てたり、多神教であった先住のケルト文明を滅ぼす為、魔女狩り等があったわけです。

こうして日本の自然界に目を転じると、周囲を豊かな漁場に囲まれ、亜熱帯から亜寒帯までの中に、世界的にみても豪雪の山脈、そこから湧く澄んだ水、それに育まれた豊かなお米など、八百万の神様が居わす日本は当然それらの恵みにより生かされているという思いに至り、日本中の神社も神に感謝する神事

を行う場としてあります。もともと自然界に対する認識は異なり、自然の中に神を見出し、我々の祖先も長い時を経ることで、沖縄では海の彼方の神となり、又山の神となり清冽な水をもたらししてくれます。雲が海の上にて、それが雨や雪を降らし、川になり海に還り生命の循環が生まれます。キリスト教のような毎週の教義を聞かずとも、お天道様が見ているからと、自然と一体の生活をしてきました。ヨーロッパのガーデニングはイギリスやオランダが知られていますが、元々植生が豊かではなく、大航海時代に南の植民地からの植物を品種改良して今に至ります。時々ヨーロッパの人たちと話をすると、日本の湿潤な気候と風土が作り出した自然界に感心しています。前述の日本の藪山も彼らから見ると豊かな生態系の一部として美しいと感じているようです。

私の住む山梨県では1984年写真家の白簾史朗氏や三つ峠山荘の先代、中村璋（たまき）など、当時山梨の山から、盗掘で貴重な植物がなくなることに危機感を持った方達の提言を、当時の県知事であった望月幸明氏が受け、1986年度から山梨県高山植物の保護に関する条例を施行、望月氏は自然保護に

理解のある方で、同時に監視員制度を立ち上げられました。条例により罰則もある為、今までのようなあからさまな盗掘には歯止めがかかりましたが、数日前に花が咲いているのを特定しておき、まだ暗い朝方や雨の日に盗掘するなど、手口が巧妙化したのも事実です。一度は、5月中頃、また数センチの芽しか出ていないのを盗掘され、掘った穴もそのままコンベエのゴミまで捨ててあったり、嫌がらせ等もありました。これは山野草の業者の依頼を受けて専門に盗掘をしている者の仕事です。普通数センチの芽だけでは判別つきません。また、アツモリソウの花の唇弁が咲くときは、大きく遠くからでも目立つため、環境省の許可を得たうえで、唇弁のみを注意深く取り除いたりもします。結果ほとんどの花の場所は分からなくなります。しかしそれを続けると受粉、交配するマルハナバチが唇弁のあるアツモリソウにも入らなくなる可能性が出てきます。あくまでも登山道近くの目立つ個体だけです。離れた個体同士の人工交配も同時にして、優良な種子もそれにより得られます。

2000年ごろまでには、社会全体も高山植物という厳しい場所で生育している植物は

地球の歴史そのものであり、採ることは悪であるという様な認識も山岳雑誌やマスコミ等で広まって、以前に比べると盗掘は減少したと思えますが、今度は以前アツモリソウを頂点とした多様な植生そのものが変わってきました。盗掘されたアツモリソウが以前あった所は植生の多様性が失われ、多くはシソ科のテンニンソウ、ササ、イネ科のカリヤスモドキ、ヤマドリゼンマイ等の大群落に変わって来たのです。テンニンソウは根が浅く広く網目状の根になり、種子からの発芽もあり、多くは数百、数千本の大群落になります。根は表層にあるため、水分やその場所の養分を一番早く吸収し、繋がった根が成長すると、背丈は最大1 mぐらいになります。葉は重なりますから、日光は下に届かず下生えに落ちた他の植物の種子は発芽できません。

最大の問題はカラ松との相性です。カラ松の下生えは枝や葉の部分から出る物質により他の植物は入り込めないので。いわゆるアレロパシー現象ですがテンニンソウは全く影響を受けず、生き生きとすrašしています。アツモリソウとカラ松の自生地はお互いに成長してきた時間等も同じで、アツモリソウは20年位の成長で株数が数本増える間に、カラ松

は高さ15 mぐらいになり枝を広げます。結果アツモリソウは芽が出なくなり、カラ松の下はテンニンソウだけになり、さらに近くの草原にも群落を広げていきます。三つ峠のカラ松は戦後、戦争により荒れた林を早く直すため、成長が早いということで植林されたものが多いのです。それにより現在は四世代目ぐらいのものがどんどん増え、木無山の1960年ごろの写真と比べますと、今は大き



1960年代の木無山

な林の状態です。それらを切れれば良いのですが、県有林、自然公園の為、様々な制約があり、何回も伐採の申請を出していますが、今のところ実現してない状態です。現状ではレッドデータブックの上位に位置するアツモリソウとどちらを保護すべきかは明白です。カリヤスモドキも一度群落化すると土壌の湿度を奪うため、他の植物を排除してしまします。以前アヤマとマツムシソウ等の美しいお



現在の木無山

花畑だった所も見ると影もありません。また乾いた草原を好むヤマアカアリの巣も多い状態です。これら群落化について県の許可を取りながらボランティアの方々と共に数回、皆で刈り取りや抜き取りを始めましたら、三年目ぐらいから想定より早く、元々のユリ科、ラン科、バラ科、等々咲きだしました。テンニンソウの根の下で発芽のチャンスをこれらの花々は待っていたのです。全体が好転化したのは、この頃からです。

二ホンジカの出現は最初大きな脅威だったのですが、当時近隣の山でも食害の報告があった為、最初相談に行った環境省が全長360m分の柵の提供してくれました。当時ボランティアとして山荘に集まった方達と相談して、業者に依頼せず私達で作ろうという事になりましたが、そ

の後の8ヶ所も全て私達での手作業です。もし業者に依頼したら、人件費等で3分の2位の長さになっていたと思います。事態の好転というのは鹿柵のおかげで盗掘の心配が減少したことです。パトロールして一番のストレスが盗掘の跡を見つけたりした時です。それらの心配が減ったことで別の保全活動が出来ます。鹿柵の設置も60代70代の女性も参加していて、作業にも慣れ、毎回15人前後の方たちにより柵の設置や刈り取りの作業を行っています。

私はJACの会員の為、本部、多摩支部の

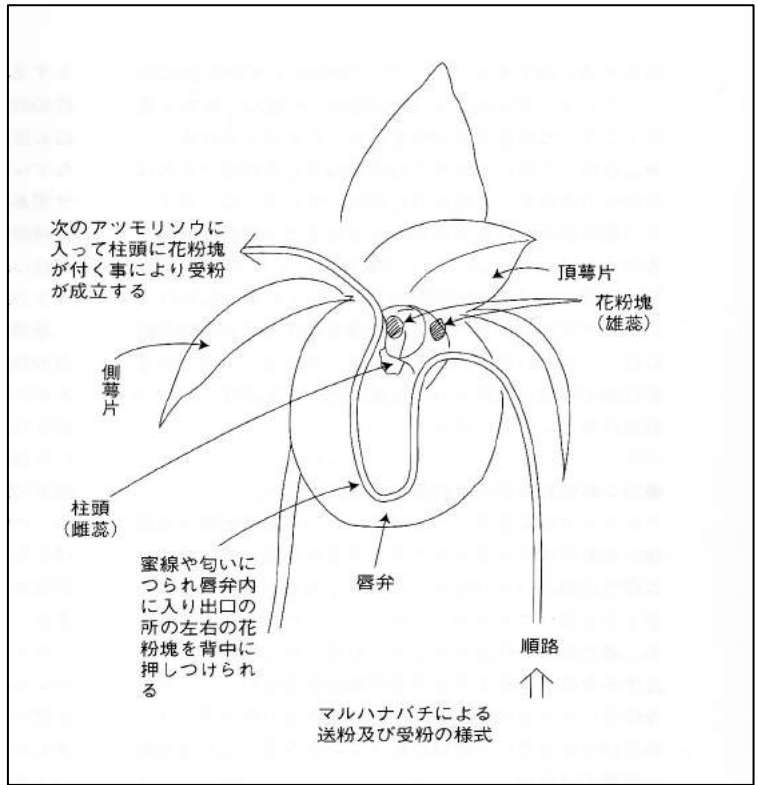


三つ峠に自生するアツモリソウ

自然保護委員の方達、山梨県山岳連盟、勤労者山岳会の方達も参加してくださっています。一度自然界を見てもらい、作業を通じ、現状が分かりますと、どうにかしなければという思いになります。昨年度の日本山岳遺産にも認定されて今年の新たな柵の費用も頂きました。柵の外と内側の守られた植生は、一目で圧倒的な違いが分かります。現在柵は金属製で1.8mの高さがありますが、数年前からこの柵の中に入り込む鹿が現れ、柵のかさ上げも必要な現状です。またレンジョウマも一番おいしく栄養が高い蕾が食べられるようになります。カモメランも近くの黒岳では食べられています。今後も更に柵の費用をどちらかにもお願いする現状でもあります。

### アツモリソウとラン科植物

世界には25000種、日本にはその1パーセントの230種があります。ランは約8500万年前の琥珀の中にも花粉があったそう、起源も古くその生態もここまで生き延びてきたたかさもありません。大きくは生育している場所により、地生ランと着生ランに分かれます。アツモリソウは地生ラン、地面に生えています。着生ランとは木の枝や岩



の苔等の空中湿度の高いところ生え、フウランやセッコク等があります。いずれにしても自身に対応する菌類を栄養源とするため、発芽や生育には自身に対応する菌類が必要です。それが細い木の枝の様な他の植物の入れないところでも、その菌があるからそのような場所でも生育できます。

蕊柱に登らせて、出るときに背中に雄しべの花粉を付けさせて、そのマルハナバチが次のアツモリソウに入ったとき、同じルートで通る為雌しべに付く仕組みです。アツモリソウの栄養源はツラスネラ菌といいますが、どこにもあるわけではなく、今あるアツモリソウは菌を持っているので、そ

また虫媒花でもあります。それぞれの花の形に対応し交配してくれる昆虫がいます。それらの昆虫との長い共進化の中で現在のラン科植物それぞれの花の形になってきています。中には光合成よりも、栄養を地下の菌のみに依存して、葉も無く暗い林床を選んだランもあります。

これらの近くに種子の散布をしています。芽を6〜7年で出しますが、実生の子株も全て成長せず、様々に条件の合ったものだけが花を持つようになります。現在の花のある個体も数百で、盗掘を免れたとき、ある程度遺伝的多様性をもてるだけの個体があったことが現在の自生地の復元につながりました。

今後も自生地復元作業の為、ボランテイアの方を募集しています。ご参加ください。

三つ峠ネットワーク 三つ峠山荘

TEL 05555767473

中村光吉(みつよし)氏プロフィール

日本高山植物保護協会理事、日本山岳会員、三つ峠山荘主人。先代の中村璋氏によって始められた植物の保全活動を引き継ぎ、数十年に亘りボランテイアの方々の協力を得ながら継続。レクチャーや自然界についての解説もを行っている。また富士の画家、写真家としても活動。時々個展を開いている。

# 「第18回ライチョウ会議」

## 新潟県高大会」報告

去る10月19・20日、新潟県妙高市にて18

回目となるライチョウ会議が開催され、本部  
自然保護委員会から谷内理事、川口委員長以  
下計5名が参加しましたので報告致します。

ライチョウ会議は、2000年8月に第1  
回大会が長野県大町市で開催され、「日本アル  
プスとその周辺に生息するライチョウに関する  
情報交換と、調査及び研究の連携を図ること  
と、ライチョウに関する知識の普及と啓発、  
保護活動に関すること等を行うこと」(ライチ  
ョウ会議設置要綱より)を目的としています。  
年1回開催され(2017年は未開催)、ラ  
イチョウ研究者や行政関係者、自然保護団体、  
山小屋関係者及び一般市民が参加し、ライチ  
ョウに関する研究成果、情報の交換や保護活  
動の提言、知識の普及が図られています。  
今回は高田宮妃久子殿下を名誉総裁にお迎  
えし、地元妙高市の中学生も参加して開催さ  
れました。

\*

### 【大会議事概要】

開催日 2018年10月19(金)20日(土)

開催場所

19日 新潟県妙高市文化ホール 大ホール

20日 新潟県妙高市新井ふれあい会館

1日目 ライチョウシンポジウム

開会 13:00

オープニングアクト 高木いくのミニライブ

セレモニー 大会長、市長あいさつ、来賓紹介

特別公演① 高田宮妃久子殿下

「鳥を通して地球環境を考えるーバードライ

フ・インターナショナルの活動ー」

特別公演② 工藤夕貴(「山女日記」主演女優)

「そこに山があるから」幸せは一步一步」

基調講演 中村浩志(中村浩志国際鳥類研究所代表理事)

「火打山のライチョウの現状と保護の課題」

パネルディスカッション

「火打山の自然とそこに棲むライチョウを

どう守るか!」

コーディネーター 中村浩志

パネリスト

長野康之(国際自然環境アウトドア専門学校専任講師)

ビル・ロス(ダンシングスノー代表)

小川結衣(ライチョウ調査ファンクラブ)

奥山正樹(環境省信越自然環境事務所所長)

質疑応答

閉会 16:30

2日目 ライチョウ保護ワークショップ

開会 09:00

第1部 生息地での生息域内保全に向けた取組

発表①「北アルプス白馬岳・白馬乗鞍における

ライチョウのなわばり分布と雛の生存状況」

(二本松裕太)

発表②「南アルプス塩見岳におけるライチョウの

なわばり分布と雛の生存状況」(杉本淳)

発表③「ニホンライチョウ分布南限地域の標識調

査でみえてきた定着と季節移動」(朝倉俊治)

発表④「中央アルプス駒ヶ岳における雌ライチ

ョウ1羽の50年ぶりの生息確認」(福田真)

発表⑤「捕食者除去で確認されたケージ保護に

よる域内保全策の有効性」(中村浩志)

発表⑥「10年間にわたる標識調査から明らかと

なった火打山ライチョウ集団の個体群特性」

(中村浩志)

発表⑦「火打山におけるイネ科植物除去実験に

ついて」(福田真)

発表⑧「飼育と野生ライチョウの腸内細菌叢確

立過程の比較」(小林篤)

質疑応答

第2部 動物園等での生息域外保全に向けた取組

発表①「JAZAにおけるライチョウ生息域外

保全の取組について」(佐藤哲也)

発表②「飼育繁殖技術の向上への取組①産卵・抱卵」(宮野典夫)

発表③「飼育繁殖技術の向上への取組②人工孵化・育雛」(高橋幸裕)

発表④「遺伝的多様性維持に向けた取組」(原藤芽衣)

発表⑤「飼育繁殖管理の向上に向けた性ホルモンと環境条件からみた生殖腺活動の調査」(楠田哲士)

発表⑥「飼育下ニホンライチョウの代謝変動と新しい栄養知見の応用」(太田能之)

発表⑦「野生ニホンライチョウを特徴付ける腸内細菌とその性質を生かした飼料開発」(牛田一成)

発表⑧「飼育下スバルバルライチョウ10年の歩みと個体群動態」(田村直也)

質疑応答

閉会 16:00 ※ワークシヨップの詳細は次号に掲載します

＊

1日目のシンポジウムの中からライチョウ会議議長を務められる中村浩志先生の基調講演の内容を紹介します。

【基調講演要旨】(大会プログラムより転載)

ライチョウ *Lagopus muta* は、北極を取り巻く地域に広く分布する鳥である。その中に

あつて日本のライチョウ *L. japonica* は、

世界の最南端にぼつんと分布し、北の集団とは完全に隔離され、本州中部の高山にのみ生息する集団である。大陸と陸続きであった最終氷期に日本列島に移り住み、その後の温暖化とともに高山に逃れることで、今日まで世界の最南端で生き延びてきた集団である。北の集団は標高の低いツンドラに生息するのに対し、日本のライチョウは高山に棲み、厳しい日本の高山環境に適応してきた貴重な集団で、国の特別天然記念物に指定されている。

遺伝子解析の結果から日本のライチョウは、南アルプスの集団と北アルプスの集団の2つに大きく分かれ、さらに後者は、北アルプス本体の集団、その周辺の火打・焼山の集団、乗鞍岳の集団、御嶽山の集団の4つに分化していることがわかった。今から35年前には日本に生息するライチョウの数は約3000羽であったが、最近では2000羽以下に減少しており、以前には高山帯にいなかったキツネ、テン、カラス等の捕食者の高山帯への侵入、シカ、サル、イノシシ等の侵入による高山植生の破壊、温暖化問題など、日本のライチョウは現在様々な課題に直面している。中でも日本で最も絶滅の危険性が高い集団は、

火打・焼山の集団である。

火打山のライチョウは日本で繁殖する最北端の集団で、日本最小の集団である。この山にライチョウが発見されたのは、今から66年前の1952年である。その後、隣の焼山にも繁殖することが確認されたが、噴火により繁殖が途絶え、最近になり復活している。発見後40年間は、火打山では10なわばり20羽程でずっと安定していた。

2007年からは、火打山で足輪による標識調査が開始され、翌2008年からは毎年の繁殖数が足輪により正確にわかるようになり、隣の焼山でも標識調査が開始された。その結果、火打山と焼山では個体の交流があること、2009年には北アルプスからの個体の移入により一時的に繁殖数が増加したが、その後は減少が続き、今年の2018年には6なわばり15羽と過去最低であることがわかった。また、火打山は温暖化の影響を最も強く受けており、背の高いイネ科植物等の侵入で、ライチョウの子育て環境や採食環境が急速に悪化していること、さらに2015年からシカやイノシシの侵入が本格化しており、絶滅の危険性が高まっていることがわかった。今後、貴重な火打山の高山環境とそこに棲

むライチョウ集団を守ってゆくには、人が積極的に自然に手を加え、生育環境の改善をはかる段階に来ている。ライチョウの子育て環境や採食環境に侵入した背の高いイネ科植物の除去、キツネ、テンといった捕食者やシカやイノシシの除去、ケージ保護による孵化後の雛の生存率の向上といった具体的な対策が急務となつて来ている。

火打山の貴重な自然とそこに棲むライチョウを次の世代に引き継ぐためには、今なにをすべきか、参加者の皆様と共に考える機会としたい。

\*\*\*

この講演の中では、今回の大会が妙高戸隠国立公園誕生に絡めて開催されたこと、シンポジウムが初めて平日金曜日に開催されて地元妙高市の中学生が参加したことについても触れられました。

また、日本のライチョウが人を恐れない世界で唯一のライチョウ類であること、その背景として日本の里と里山、奥山といった考え方、山岳信仰に基づきライチョウを神の鳥として殺生を禁じた文化があったことの説明もありました。

さらには孵化後の雛を人の手で守るケージ

保護とキツネ、テンといった捕食者除去との相乗効果による生存率向上取組の成果を説明して頂きました。

一般市民によるライチョウ保護の取組の一つであるライチョウサポーター制も登録者が1000人を超え、行政と一般市民と協力して保護に取り組む意義と必要性についても訴えられました。

現在、自然環境を保全する為には人間の関与を排除し手を付けずにそっとしておく、捕まえないなどといった消極的な手法ではもう守れない、そのような時代は終わったことを強調されていました。

危機が迫るライチョウですが行政と一般市民の協力で出来ることを今からやっていけばまだ間に合う、ライチョウを絶滅から守れるとの提言も頂き、今後の私たちがなすべきことについての方向性も示唆されました。

最後にこれからは登山者の協力も非常に重要になるとの要望もあり、私達日本山岳会員が率先してそれにこたえるべきではないかと感じさせられた講演でした。

#### 【大会総括】

2日間にわたってシンポジウム、ワークショップと行われた今大会はライチョウに関する

最新の調査・実験結果が関係者のみならず一般市民にも聴講出来た貴重な機会でした。約1000名が参加した1日目のシンポジウムでは、中村浩志先生による基調講演の他、

高円宮妃久子殿下による世界的な希少鳥類保護活動についてのご講演や女優・工藤夕貴さんによる「山に登る」ということについてご自身の体験を通した話がありました。

また、パネルディスカッションでは各方面で活動されている4名のパネリストよりそれぞれの視点による火打山のライチョウへの意見を伺うことが出来ました。

2日目のワークショップは約300名が参加し、各分野での専門家から学会レベルという最新かつハイレベルな内容の発表があり、域内外における保全の現状と課題など大変貴重な話を聞く機会を得る事が出来ました。

今大会では専門家や行政による調査・保護活動だけではなく、一般市民による保護活動の重要性も提示されました。筆者も積極的にライチョウ保護の活動に関わりライチョウを守りたいとの思いを深めた2日間でした。

尚、関連イベントとして10月21、22日にエクスカーションが実施されたことも併せて報告致します。

(報告：日吉 健治)



## 連載コラム

### 「ライチョウといつまでも」

自然保護委員 日吉 健治

#### ②ニホンライチョウの生態

ニホンライチョウの生態については研究者や山岳関係者らの生息地及び飼育観察によりかなり明らかになってきています。

まず生息地ですがライチョウが生息する山岳は矢沢米三郎氏により戦前の昭和4年にほぼ明らかにされています。

現在ライチョウが生息する山域は本州中部の山岳地帯で北から頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、南アルプスで北限の生息地は火打山、南限はイザルガ岳でこのイザルガ岳に生息するライチョウが世界で最も南に住むライチョウです。

かつては中央アルプス、白山、八ヶ岳、蓼科山にも生息していましたが、中央アルプスは昭和60年代、白山は昭和初期、八ヶ岳・蓼科山は江戸期に絶滅しています。

ライチョウは氷河期の遺存種で寒冷な気候下でしか生きられませんので日本で生息できるのは高山地帯に限られます。

高山で見られる鳥はライチョウの他にホシ

ガラス、イワヒバリ、カヤクグリなどいます。が一年を通じて高山・亜高山帯に生息するのはライチョウだけで日本で唯一の高山鳥です。

北アルプスでは標高2400m、南アルプスでは2600mの森林限界以上のハイマツ帯に生息していますが、このハイマツが氷河期から今日までライチョウが生き残ることが出来た大きな要因です。

隠れ場所、営巣地、時には食べ物として厳冬期以外ライチョウはこの植物を利用してほぼ全ての生活をおくりまわります。

ライチョウはこの高山帯で主に高山植物を食べています。完全な植物食ではなく時期により昆虫も摂取しています。

ライチョウが好む植物はガンコウラン、コケモモ、ミネズオウ、クロマメノキ、コメバツガザクラなど矮性常緑低木の芽、葉、実、種子やハクサンイチゲの花なども食べます。

冬は高山帯では雪で食べ物が埋まってしまいうため、森林限界付近まで下りてきて、主としてダケカンバの冬芽を食べますが、ナナカマドの実なども摂取しています。

今回はここまでとなりますが、次回はライチョウの体の特徴・形態について紹介します。

## ライチョウ通信

### ◎ライチョウの新刊書籍紹介

- ・著者 中村浩志 小林篤
- ・タイトル 「ライチョウを絶滅から守る！」
- ・出版社 しなのき書房

ライチョウ研究の第一人者、信州大学名誉教授の中村浩志先生と東邦大学の小林篤氏の共著となるライチョウの新刊書籍が出版されましたのでご紹介します。

中村先生はご存知の通り日本を代表するライチョウ研究者で信州大学退官後、中村浩志国際鳥類研究所を立上げてライチョウの研究や保護など精力的な活動をなされています。小林氏は中村先生と共に研究をされていて先生の後継者となられる新進気鋭の若き研究者です。

中村先生の前著「二万年の奇跡を生き延びた鳥・ライチョウ」から5年、最新の研究結果を交えた内容で、中村先生と小林氏のライチョウを守るといふ力強い思いのこもった皆さんに是非読んで頂きたいお勧めの1冊です。

## ◇自然保護委員会の活動記録◇

～九月度～

### 報告・連絡事項

①理事会報告 9月12日(水)

\*複合機を更新し説明会の案内。

②山岳7団体自然環境連絡会9月13日(木)

川口委員長出席。

\*会則を再度検討。

③自然保護委員会報告

\*8月24・25日石川支部自然保護委員の安田二三男氏葬儀に谷内常務理事、川口委員長

参列。

\*9月1日(土)新入会員オリエンテーションに川口出席。自然保護委員会を紹介。

\*9月3日(月)120周年記念事業委員会に川口委員長出席。

\*科学委員会主催9月8・9日ライチョウを訪ねて乗鞍岳へ―探索山行に川口委員長、日吉委員参加。

\*9月25日(火)『木の目草の芽』134号発送。

④自然保護委員会9月10日(月)19時

\*携帯トイレ普及活動担当の西谷委員があきる野市、奥多摩町に続き、東京都水道局を訪問予定。

\*10月31日(水)19時～ルームで講座開催「植物観察の基礎知識を学び合いましよう」

講師・下野綾子自然保護委員(東邦大学理学部生物学講師)。

### 協議事項

\*2019年度自然保護全国集会開催地を検討。委員会希望地は埼玉支部。埼玉支部に依頼。

\*実行委員長に川口委員長選出、決定。

～十月度～

### 報告・連絡事項

①理事会報告10月10日(水)

\*理事の定年及び再任の制限について。

\*寄付金の受領報告。(記・マナーノート委員会宛寄付窓口設定)。

②山岳7団体自然環境連絡会10月26日(金)川口委員長出席。

\*各団体の活動報告。規約の検討。

\*埼玉支部玉原高原自然観察会10月13日(土)～14日(日)に川口委員長参加。

全国集会開催の依頼をする。

③自然保護委員会10月16日(火)19時

\*2019年度自然保護全国集会開催地・埼玉支部と共催決定。7月開催予定。

\*第18回ライチョウ会議が妙高市で10月19日(金)～20日(土)開催。谷内理事、川口委員長、山田、日吉、和田委員が参加。

\*12月1日の晚餐会会場で「携帯トイレを使いましよう」のアピール及び販売をする。携

帯トイレ購入者にカンバッチを配布しアピールに協力してもらおう。

\*ルームで携帯トイレを販売するための手続きをとる。

\*「植物観察の基礎知識を学び合いましよう」講座開催・10月31日(水)19時～20時30分。参加者・7名。

### 協議事項

\*今年度の活動について。

\*全国集会日程など。

\*HAT-J神崎会長から、自然保護活動活性化に伴う支援要請があり、「自然保護を考える」をテーマに学び合いの会の開催要請があり11月16日(金)19時～開催決定。

《編集後記》フランス政府が絶滅回避の目的でピレネー山脈に2頭のヒグマを放獣、それに対して畜産農家が抗議しているとのこと。どこでも似たような問題を抱えているなど思いながら新聞記事を読みました。放たれたヒグマはスロベニアからやってきたそうですが、異国の地に連れてこられてさぞや心細い思いをしているのでは。クマは繊細な生き物ですから今ごろ戸惑って不安定になっているはず。この2頭の雌グマが人間の思惑どおりに繁殖に貢献してくれるのか、気になるところです。

元川